

	令和4年 秋季号 令和4年11月23日発行 鹿児島大学農学部 あらた同窓会 学生会員向け会報 電話 099-285-8537
--	---



附属農場学内圃場から桜島を望む





附属農場学内圃場のイネの開花



附属農場学内圃場におけるイネの調査風景

目次

1. 巻頭言 アンサンブル的な手法による創造力を期待する	藤田晋輔	2
2. 農学部附属施設の近況について	橋本文雄	3
3. 岡本 新先生の思い出	下桐 猛	4

ビバ・キャンパスライフ

●農業生産科学科

4. 応用植物科学コース 「大学6年間を振り返って」	蔬菜園芸学研究室	修士2年	仮屋 萌々子	5
5. 畜産科学コース 「馬と過ごした4年間」	家畜育種学研究室	学部4年	桑原 美海	5
6. 食料農業経済学コース 「黒糖焼酎との出会い」	農業経済学研究室	修士2年	山内 孝仁	6

●食料生命科学科

7. 食品機能科学コース 「自分との闘い」	生命高分子化学研究室	学部4年	松田 和美	6
8. 食環境制御科学コース 「家庭菜園と出会う」	植物栄養・肥科学研究室	学部4年	久保 舞華	7
9. 焼酎発酵・微生物科学コース 「鹿児島に来てよかった」	応用分子微生物学研究室	修士2年	今村 華澄	7

●農林環境科学科

10. 森林科学コース 「拝啓、4年前の自分へ」	森林政策学研究室	学部4年	石塚 敬人	8
11. 地域環境システム学コース 「大学での吹奏楽を通して」	利水工学研究室	学部4年	進藤 美和	9

●国際食料資源学特別コース（農学系サブコース）

12. 「友人様様な生活」	熱帯作物学研究室	学部3年	松田 明子	9
---------------	----------	------	-------	---

教育実習奮闘記

13. 「教育実習を振り返って」	農業生産科学科 害虫学研究室	学部4年	福田 正宗	10
14. 「今日、先生始めます」	食料生命科学科 食品化学研究室	学部4年	古庄 珠実	10
15. 「教育実習を振り返って」	農林環境科学科 農地工学研究室	学部4年	手嶋 清香	11

インターンシップ体験記

16. 「インターンシップを終えて」	農業生産科学科 家畜繁殖学研究室	学部3年	古賀 涼香	11
17. 「インターンシップを終えて」	食料生命科学科 醸造微生物学研究室	学部3年	林田 眞歩	12
18. 「インターンシップを通して学んだこと」	農林環境科学科 農地工学研究室	学部3年	三浦 菜名穂	12

介護体験記

19. 「介護等体験を通して」	農業生産科学科 観賞園芸学研究室	学部3年	山手 風沙	13
20. 「介護体験実習を終えて」	食料生命科学科 植物栄養・肥科学研究室	学部3年	久徳 美咲	13
21. 「介護体験記」	農林環境科学科 森林保護学研究室	学部3年	首藤 広大	14

留学体験記

22. 「コロナ禍でのマルタ共和国への留学」	農業生産科学科 家畜繁殖学研究室	学部4年	住田 耀子	14
23. 「留学を終えて」	食料生命科学科 植物栄養・肥科学研究室	学部3年	鶴田 真帆	15

編集後記				16
------	--	--	--	----



アンサンブル的な手法による 創造力を期待する

鹿児島大学農学部あらた同窓会
会長
藤田 晋 輔

令和4年4月入学の1年次の皆さん、大学生活に慣れましたか？2、3年次の皆さんは目標に向かって充実した生活を過ごしていますか？4年次、大学院生が秋号の定番となったキャンパスライフや海外留学等の体験記を書いてくれました。これらの体験記を将来の目標に向けた自己研鑽の参考にして欲しい。

さて、科学技術が如何に進んでも、人間の能力は自然のそれに到底及ばない。特に気象、農業や災害まで広げると、「自然の営み」が明確にされ、「人間の生きざま」に係る課題と解決法が見えてくる。幅広く礎を学び、「種々の分野の知の集積」をベースに「創造力」を培う必要があるが、30歳前後迄の「創造力」がその後の「完璧な礎」となり、それ以降の数年の努力が大きな花を咲かせると言われている。

江戸時代末期、薩摩藩は「産業革命」による英国の発展の知見と世界の趨勢を知らしめるために、新納刑部（大目付）を団長とした島津斉彬の薫陶を受けた松木弘安（第4代外務卿寺島宗則）、五代才助（五代友厚）、英語通辞堀 壮十郎（長崎県出身）の秘密外交使節団（4名）と、小姓組、開成所書生等から選抜した13歳～28歳の若き俊英15名の計19名に異なる目標を課し、武器弾薬、戦艦等の購入資金を含め約600億円と言う膨大な藩費を準備し、慶応元年3月串木野羽島の浦から極秘裏に英国に送り出した。彼らは未知の世界への約4ヶ月間の航海と英国滞在中に武器製造、石炭によるエネルギー化、運河の土木工事、綿花栽培や織物機械製造等の多くの知見を得ている。しかし、薩摩藩の資金の都合と維新後の疾風怒涛の国内事情の変化により、1年で大部分が帰国し、新政府に出仕した。村橋久成は農事試験場開設および「開拓使麦酒醸造所（サッポロビールの前身）」等の創設に参加した。一方、若干13歳ゆえに大学で学べず、グラマースクールで学んだ長澤 鼎は遅れて慶応3年に渡米し、カリフォルニアのブドウ園、ワイン工場を宣教師ハリスから引き継ぎ、「葡萄王」と呼ばれたが、終生帰国しなかった。長澤 鼎と共に渡米した他の5人の内2人は帰国命令が出て帰国。残りの2人はそれぞれ海軍兵学校、理財関係の大学を卒業・帰国し、海軍中佐、大蔵省に出仕している。一様に航海中、英、米国滞在中に得た多くの分野を創造たくましく会得し、アンサンブル的な手法で時代を動かす礎を作り上げた薩摩藩の貢献度は非常に大きい。このように、どのような形でも未知の世界に飛び込んで多くのことを横断的に学ぶことが必要である。

昭和55年鹿児島大学に移籍してから、従来の継続研究に加え、平成2年からゼロエミッションの範疇にある「地産地消を目指したエネルギー化」の技術開発に取り組んだ。予てから、意見交換していたイタリア北部のBolzano、Brunicoにある世界的に高いシェアを誇るイタリアのバイオガス発電プラントメーカーBTS社（BTS Biogas Srl/GmbH）のメタン発酵施設とグループ企業（Alpen Gas）のメタンガス活用の技術調査と意見交換に平成24年1月に出かけた。平成27年に家庭の台所に導管経由でバイオガスを自己資金で配送することを予告してくれた。筆者は一般廃棄物から得られたバイオガスを電気エネルギーでなく、天然ガスに添加して供給する構想が確信に変わり、平成18年頃鹿児島市に提案した【台所から台所へ】の事業化すなわち「バイオマス系一般廃棄物（地産資源）」を活用した「地域エネルギー（地産資源）事業」が平成25年に決定された。その後、各種手続きを経て国内メーカーによる鹿児島市新南部清掃工場（一般廃棄物60トン/日処理）が令和4年4月に稼働した。現在では天然ガスにバイオメタンガスを添加したSDGs対応の「地産地消型新エネルギー」が人口約59万鹿児島市民の台所に導管による配送が始まっている。イタリアに約7年遅れたが、自治体とガス企業の連携が上手く行ったことが日本最初の施設となった。

我が国でも新しい研究分野の開拓が盛んになってきたが、研究環境の悪化と若者の個人プレーが多く見られ、横断的取り組みが減少している。総合大学で学ぶ皆さんには、ぜひ「異分野と連携して創りあげるアンサンブル的な手法による創造力の創生」を期待したい。

農学部附属施設の近況について



農学部長
橋本文雄

あらた同窓会、在校生の皆様、こんにちは。いかがお過ごしでしょうか？

農学部には附属施設として附属農場、附属演習林、附属焼酎・発酵学教育研究センターの3つの施設があります。最近の取り組み事例をご紹介します。

初めに、附属農場・入来牧場において、昨年令和3年8月に一般社団法人・日本草地畜産種子協会より「放牧畜産実践牧場認証」を取得し、加えて12月には「放牧畜産実践展示牧場」の承認を受けました。この認証制度は、日本草地畜産種子協会が制度化している認証制度で、この認証には放牧畜産の基準が定められ、放牧を広く普及推進するために、放牧を実践する生産者が順守すべきガイドラインが制定されています。入来牧場は「肉用牛繁殖経営」として申請しており「放牧畜産実践牧場」と表示することができるようになりました。この認証等を取得できたことで、今後は入来牧場における教育研究のみならず、畜産科学の教育研究分野においても大きな教育効果が期待されると思っています。

次に、附属高隈演習林において、一般社団法人・緑の循環認証会議・日本PEFC認証管理団体[Sustainable Green Ecosystem Council・PEFC National Governing Body in Japan]へ「SGEC FM認証（森林認証）」を申請し、令和4年3月に認証を取得しました。森林認証とは、「木材が、持続的に管理された森林から伐採されたものであることを証明する仕組み」であり、SGEC FM認証は日本国内状況に合わせて作られた、国際認証と相互承認を受けている国際的に認められた認証制度として、森林管理に関する環境、社会及び経済の分野を網羅した基準です。今回、SGEC FM認証を取得したことにより、鹿児島県内組織が管理している森林が認証を受けた最初の例となり、県内の森林認証取得の先行モデルとしてのその価値は大変高く、また、第4期中期目標・計画に掲げているSDGsの推進（15. 陸の豊かさを守ろう：森林の持続的な管理）の取り組み例でもあります。今後、高隈演習林から生産される木材（立木、丸太）は、国内外で求められている森林認証材として国際的にも流通させることが可能となりました。

附属焼酎・発酵学教育研究センターは、「酒類に係る教育、研究、地域貢献、産学連携及び国際交流等の各方面にわたって広く協力し、社会にその成果を還元し、我が国の学術の発展、人材の育成に寄与すること」を目的として、新潟大学日本酒学センター及び山梨大学大学院総合研究部附属ワイン科学研究センターの3者の間で、令和3年9月30日に協定を結びました。この協定により、3大学間での酒類に係る教育・研究、交流・人材育成、地域貢献と産学連携、国内外の機関等との連携が可能となり、日本国内の酒造に係る人材育成が大きく進展することが期待されます。

最後に、令和4年4月1日より農林環境科学科内に「スマート農学コース」を新設しました。この教育コースは、本年4月の入学生から2年次の進級時のコース分けの際に選択できる既存のコース2つに加えて新設された「スマート農学コース」です。農学部は、これを契機に魅力ある地方大学・農学部の機能を強化するとして、農林畜産物の生産・流通・加工のバリューチェーン型教育カリキュラムを配置し、農林業のDXやグローバル化を推進するため、ドローン実習やIoTセンサーの活用等を含む農林畜産物ビッグデータを解析する知識集約型社会の構築に貢献でき、すなわち、デジタルと専門分野の教育を掛け合わせた実験・実習カリキュラムの高度化を図り、その取組の基盤となる教育設備等を行い、デジタル化が進む産業分野をけん引する高度な専門人材として、地方創生に向けた農林畜産業を志す人材を育成します。

在校生、卒業生・修了生の皆様には、まだまだ新型コロナウイルス感染の収束が見えないところではありますが、健康に過ごされますことを心よりお祈り申し上げます。そして、同窓会の皆様方のご協力をいただきたく、農学部の今後の取り組みに対して、その目標を達成すべくしっかりと取り組んで行きたいと思いますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

岡本 新先生の思い出

令和4年5月27日の夜、岡本 新先生が突然の病により急逝されました。私は平成11年9月に鹿児島大学に着任以来、20年以上にわたって公私ともに大変お世話になりました。ここで御礼も込めて、岡本先生の思い出を記載します。

岡本 新先生は宮崎県のご出身で、昭和55年に九州大学農学部畜産学科を卒業、昭和57年同大学院の修士課程を修了後、昭和57年10月に家畜育種学研究室の助手として鹿児島大学農学部に着任されました。平成5年に助教授、平成15年に教授に昇任され、私を含めて家畜育種学研究室をずっと支えてくださいました。

先生のご研究は主に東南アジアで飼育されている在来鶏集団やその祖先種であるヤケイを採材、彼らの染色体・タンパク質・DNAで得られる変異を解析、互いの遺伝的類縁関係や各集団の遺伝的多様性を評価するものでした。東南アジアに調査や学会に行かれる機会をととても楽しみにされておられ、在来鶏の採材と、当時の連大の学生と学会やタイの町を満喫されていた記憶が思い出されます。また、連大では5人の博士を主指導教員として指導・輩出されたように後進の指導も熱心でしたし、研究室にほぼ1年中いらっしゃるほど、大学や研究室が大好きな先生でした。

岡本先生はよくご自身のことを（ドラえもん）のジャイアンだと話しておられましたが、実際は相手や周囲によく配慮され、大変寛容な先生でした。おかげで私は自由に研究活動をさせていただきました。また、学生の立場をよく考えられる先生で、そういった姿勢もあって特にご着任当初の卒業生とのネットワークは未だに強固でした。他方、会議や研究発表会では興味がないのかなと思ったときに、鋭いご意見を述べられ、とても参考になった記憶があります。

コロナ禍まではほぼ毎日昼食をご一緒させていただき、研究のこと、農学部のこと、私生活のこと、いろいろな話題や相談をさせていただきました。コロナ禍以降はほとんど居室に籠っておられ、会話も減ってしまったことが残念でなりません。岡本 新先生のこれまでの長年にわたるご指導とご厚誼に対し深く感謝申し上げますとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

（下桐 猛）



岡本 新 先生



岡本 新 先生還暦会



タイ在来鶏の採材風景



農業生産科学科

応用植物科学コース
(農林水産学研究科・農林資源科学専攻
・植物生産科学コース)



「大学6年間を振り返って」

蔬菜園芸学研究室

修士2年 仮屋 萌々子

大学院まで合わせた6年間の大学生活を振り返ってみると、本当に一瞬でした。部活、研究室、旅行、バイト、今思えば大学生ならではの経験をたくさん積むことができたと思います。まずは何と言ってもテニス部での経験です。私の人生でかけがえのないものになりました。見学した時に指導者もいないのに全力で練習に取り組んでいるのが魅力的で入部しました。しかし、思い描いていた大学生活と全然違いました。練習は週4日、その他の日はバイト、バイト代はほとんど遠征費や試合のエントリー代に消えました。テニスがこんなにお金がかかるなんて初めて知りました。幼少期からテニスを習わせてくれた両親の偉大さを、身をもって実感した経験です。しかし、大変なだけあって団体戦で試合に勝てたときの爆発的な嬉しさや先輩・同期・後輩との楽しいいざごは一生忘れられない経験になりました。私の人生で最も重要な時間だったと思います。

楽しくも忙しすぎた部活は4年生になる前に引退しました。それからは研究室でトマトの研究の始まりです。研究室にも面白い先輩たちがたくさんいました。難しそうな研究をされていてカッコいいなあという印象でした。現在大学院2年生ですが、後輩にもあの頃の私と同じような印象を持ってもらおうべく卒業まで頑張りたいと思います。

その他に、旅行にもたくさん行きました。海外にいた姉と「ドイツで待ち合わせ」を実現できたことは、私のプチ自慢です。テニス部の同期と後輩の3人で行った屋久島旅行では、朝5時に登山を始めて太鼓岩で朝日の出を拝めたことやそこでお弁当を自分だけ忘

れて渋々おかずをお裾分けしてもらった思い出は最高です。

今はコロナ渦でいろんなことが制限されていますが、大学生活は思ったよりも短くてあっという間です。コロナに縛られず、たくさんの人と関わって大学生活でしか味わえないことを少し無理してでもやり遂げてほしいなと思います。

畜産科学コース



「馬と過ごした4年間」

家畜育種学研究室

学部4年 桑原 美海

私の大学生活は、馬に費やしたと言っても過言ではありません。入学して間もなく馬術部に入部し、毎朝練習に励んできました。始めたばかりの頃は、うまく乗りこなすことが出来ず悔し涙を流すこともありました。それでも諦めずに乗り続け、馬の制御が出来るようになり、自分では上達したと思っていました。ところが、2年生の9月に挑んだ初試合では下から5番目と惨敗し、見事に鼻を折られました。この悔しさからやる気により一層火が付き、高い障害の飛越といった高度な技も披露できるようになりました。しかし、年に数回の試合では、2位で惜敗することがほとんどで、1位を獲得することができませんでした。

ところが、3年生になって新しくやってきた馬によって運命が大きく変わりました。この馬は4年生になった今でも相棒として試合に出場し、私に初めて1位を取らせてくれて、全国大会への道も作ってくれました。この馬は大きくて、おっとりしていてかわいいのですが、不機嫌になると私を振り落とします。私は何度も落馬しているうちに落馬に対して恐怖心が芽生えてきました。恐怖心は馬にも伝わってしまい、良い動きが出来なくなりました。そんな状態が1か月ほど続いて、馬術を辞めたいと思うようになっていました。しかし、諦めたら今までの努力を無駄にする気がしたので、諦めずに乗り続け、恐怖心に打ち勝つことができました。もう少しで夢に見た全国大会です。今までの集大成になるので、愛馬と共に全力で挑みたいと思います。

最後に、毎日練習してきて、つらい日もありましたが、愛馬と共に乗り越えてきたからこそ全国大会出場

(6) あらた同窓会学生向け会報

を果たすことが出来たと思います。馬術部では、講義では教わらない大事なことを学べました。引退しても、今まで関わってくださった方々に感謝の気持ちを忘れずにたいです。

食料農業経済学コース



「黒糖焼酎との出会い」

農業経済学研究室

修士2年 山内 孝仁

「黒糖焼酎」。聞きなれない言葉だと思います。福岡県出身の私は大学3年時まで知る由もありませんでした。

名前の通り黒糖を使っており、鹿児島県から南に約300km離れた離島、奄美群島のみ製造が許可された特殊な焼酎です。

現地にて、教授方との奄美の農産物の調査に同行した際に知りました。

「なんだ、このお酒は!？」

焼酎独特の臭さ、飲みにくさがほとんど無く、黒糖のほんのりと甘い香りが、口の中に広がりました。元々お酒好きな私は、一瞬で魅了されました。

同時に研究対象にしようと筆を取りましたが、卒業論文だけでは納得いかず、大学院にてより「黒糖焼酎」について研究しようと決心しました。

学べば学ぶほど、奄美という離島経済の困難さ、不便さ、特殊さが「奄美での調査」にて垣間見えました。先日、奄美大島・徳之島が世界自然遺産に登録されました。世界中の注目が小さな島に集ったのです。

しかし、奄美群島でしか作られないといった特別な条件があるにも関わらず、このお酒はあまり知れ渡っていません。現にあなたを含め、あなたの周りに「黒糖焼酎」を知っている人が何人いるのでしょうか？

離島という産業の少ない中、経済を支える手段の一つが、黒糖焼酎。ですが、世の中の風潮を見れば分かる通り、私たち日本人のアルコール消費量は減少し、「特殊性」だけでは売れない、酒類にとって厳しい時代なのです。また近年は、新型コロナウイルスによって、旅行、飲食等による外出は制限され、特にお酒の消費量は大幅に減少しました。黒糖焼酎も例外ではありません。

これを読んだ皆様には、少しでも黒糖焼酎に興味が

沸きましたら、お近くのスーパーや酒屋にて、また、実際に奄美群島に行って飲んでほしいです。

食料生命科学科

食品機能科学コース



「自分との闘い」

生命高分子化学研究室

学部4年 松田 和美

私の大学生生活を振り返ってみると、自分との闘いが多かったのではないかなと思います。大学1年の時は新しい友達、初めて自分で稼げるアルバイト、やってみなかったサークル活動など、どれも新鮮なことばかりで毎日が楽しかったです。でもそんな中でも新しい環境に対するストレスが大きかったらしく、高校時代の友達に久しぶりに会った時に号泣してしまったこともありました。大学2年になってからはコロナによってそれまでの当たり前の生活がなくなりました。行ってみたかった海外に行くことができなくなり、旅行にも行けず、サークルの活動も制限され、仲のいい友達にも会えない。外に出たり、人に会ったりすることが自分のエネルギーになっていた私にとって、本当に苦痛でしかなかったです。そして大学3年から4年にかけての就活では今までで一番つらい時期を過ごしたのではないかなと思います。就職以外にも選択肢はたくさんあることを知って、でも自分のやりたいことが全くわからず、毎日毎日「私は何がしたいの?」と問いかけては答えが出せずに、苦しかったです。どうしてこれまでの時間をもっと考えて大切に使ってこなかったのだろう、大学に進学したのは間違いだったのかもしれないと、もうどうすることもできない過去に対して後悔したこともたくさんありました。しかし大学に進学したからこそ、たくさんの人に出会うことができ、様々な経験ができ、自分を支えてくれる人たちを見つけることもできました。また、時間の大切さや日常が当たり前に過ぎていることのありがたみを改めて感じることができました。

この4年間は苦しいことが多かったけれど、その一つ一つが私を成長させてくれたのではないかと今では思います。ここで自分自身と闘ってきたことを糧にこ

れからも色々な壁にぶつかりながら成長していきたい
と思います。

食環境制御科学コース

「家庭菜園と出会って」



植物栄養・肥料学研究室
学部4年 久保 舞華

皆さんは頑張って勉強した講義でもテスト後にはほとんど忘れてしまうなんてことはありませんか？講義をしてくださった先生方にはとても申し訳ないのですが、私にはあります。その原因が大学4年過ごしてやっと分かりました。私は受動的に学ぶ姿勢が染みついていました。高校までの授業はほとんどの授業が3年間を通してゆっくり振り返りを交えながら進んでいきました。そのため受動的に学んでいてもある程度知識が入っていました。しかし大学の講義では半年という短い期間で1つの学問について教えてもらいます。ただ受動的に講義を受けているだけで、振り返ることもなく単位が取れたことに満足し、そのまませっかくの知識が脳から零れ落ちていました。そんな私の学習スタイルを変える趣味に出会いました。それは家庭菜園です。まずは何もなかった庭に畑を作ることから始めました。畑を一から作るには想像していた以上の知識が必要でした。土壌や肥料についての知識はもちろん、土を買う必要があったので土の体積の計算についても学びました。2トントラックで黒ボク土を運び、土壌改良剤や肥料をタイミングを考えて混ぜ、重要な畑の基礎を作り上げました。その後は育てる作物の育て方や品種、資材の使い方といった知識を学び、トマトやキュウリ水菜といった作物を育てました。その最中には害虫の被害にあい、害虫や農薬の知識についても学びました。家庭菜園には農学部で学ぶ多くの学問が詰まっていました。家庭菜園を通して大学で学んできた知識を能動的に振り返り、より深く学ぶことができ自分のものにできました。この経験を活かし、今後も能動的に様々なことに取り組んでいきます。

焼酎発酵・微生物科学コース



「鹿児島に来てよかった」

応用分子微生物学研究
修士2年 今村 華澄

知り合いがほとんど居なかった鹿児島に住み始めて早4年以上が経ち、気づけば鹿児島での生活も残り僅かとなりました。初めの頃は、慣れない環境での不安、地元の友人や家族に会えない寂しさから、愛媛の実家に帰りたと思うこともありました。しかし、友人や先生方をはじめとして周りの方々に恵まれ、楽しくてあっという間の日々を過ごすことができ、今となっては「鹿児島に来て本当に良かった」と感じています。学業や就職活動など、決して楽しいだけではなく苦しいこともありましたが、みんなも頑張っているからとやる気をもらえたからこそ、乗り越えることができました。鹿児島に来て良かったと思う理由としてもうひとつ、鹿児島でしかできない経験ができたことも挙げられます。せっかく鹿児島に来たからと、アルバイト先は鹿児島の郷土料理などを提供している飲食店を選び、学科のコース選択の際も、“学部で焼酎のことを学ぶことができるのは鹿大だけ”と知り、焼酎発酵・微生物科学コースを選択しました。焼酎瓶のラベル作成や酒造会社での焼酎製造実習、利き酒や香気成分の学習など、振り返ってみても他の大学にはないであろう講義を受けることができました。これらの講義をきっかけに元々は苦手だった焼酎に少しずつ興味を持つようになり、これなら飲めるという焼酎を見つけることもできました。これらの経験を通して他の都道府県のことも知りたい、行ってみたいという気持ちを持ち始め、「生きているうちに47都道府県全てを訪れる」という人生の目標ができました。

数か月後には新社会人として働き始めると思うと不安な気持ちはもちろんありますが、今のところ楽しみという気持ちの方が大きいです。大学での生活を振り返って「鹿児島に来て良かった」と思えたように、次の環境でもここに来てよかったと思えるような日々を送りたいです。



農林環境科学科

森林科学コース



「拝啓、4年前の自分へ」

森林政策学研究室

学部4年 石塚 敬人

夢もやりたいことも目標もないまま、単に「地元で林業が盛んだから」という理由だけで鹿児島大学農学部に進学した私にとって、大学生活は不安要素で埋め尽くされていた。

実際に大学生活が始まると、想像よりも何倍、何十倍も忙しかった。8:50~17:40は大学で講義を受け、終わり次第バイト先に直行し23時まで働き、帰宅してから風呂に入り、諸々の家事を終らせると、大体午前1時を過ぎている。正直、高校生時代と何も変わらないどころか、家事やバイトがあったため忙しかったといえるような日々を送っていた。

1年生の頃は、共通教育科目は高校生までに学習したことの復習であり、専門科目もあまり興味がない分野であったこと、上記のように忙しい日々を送っていたことも相まって、とても「楽しい」学生生活を送っていたわけではなかった。

しかし、2年生になると激変した。1年生の頃とは異なる専門分野に踏み入った講義と実習、様々な外部講師の方々のお話があり、その中で非常に興味を惹かれる内容があった。そこからの行動は早かった。まずは、1年生の頃の講義資料をもう一度復習し、興味のある分野に関する本を読み、インターネット上の記事を読んだ。私が初めて、自ら勉強をした。「やらされる」ではなく、「進んでやる」勉強の楽しさを知った。

3年生になると、更に踏み込んだ専門分野の講義と実習が始まった。実際に山の中に入り、樹種を判別するために葉っぱの形や特徴を覚えたり、樹高を図るために専用の機械を用いて計測したりと、普通科高校から進学した私にとって、何もかもが新鮮で楽しかった。また、研究室に配属され、先輩方の行っている研究の話聞くのも本当に楽しかった。

4年生になると遂に卒業論文への取り組みが本格的に始まった。調査は初めてやることだらけで非常に大変であったが、それ以上に楽しかった。また、集中講

義の一環でドイツへ研修に行った。日本とは何もかも異なる森林の姿や非常に巨大な林業機械、人々の森林への接し方を学んだ。その中で、自分がまだまだ日本の森林について無知であることを自覚し、今まで以上に学習意欲が高まった。

こうして私の大学生活を振り返ってみると、勉強とバイトばかりの大学生活で、当然忙しくはあったが、2年生になってからは苦痛に感じたことはなかった。当然、コロナ禍の影響を受け、講義が遠隔になったり、実習そのものが実施されなかったりした際には、多少不満に感じたり、モチベーションが下がったりしたが、自ら「進んで」勉強を行っていたため、完全に気持ちが途切れることはなかったし、楽しく過ごすことが出来た。（唯一心残りがあるとすれば、チェンソーを用いた実習を行えなかったため、現場作業のことを体験する機会が失われたことだ。）

大学入学当初は不安だらけであったが、大学生活が終わろうとしている今、私は胸を張って「充実した大学生活であった」と答えることが出来る。

最後にこの場をお借りして、丁寧にご指導くださった先生方や些細な相談にも笑顔で応じて下さった先輩方、様々な刺激を与えてくれた素晴らしい友人達、そして私の大学生活を支えてくれた家族に感謝申し上げます。



ドイツでの研修風景(1)



ドイツでの研修風景(2)

地域環境システム学コース



「大学での吹奏楽を通して」

利水工学研究室

学部4年 進藤 美和

私は中学生のころから吹奏楽を始め、高校でも吹奏楽を続けてきました。初めは特に理由もなく吹奏楽部に入部しましたが、次第に大人数で1つの目標を達成するために努力する楽しさに魅せられました。

大学に入り、また吹奏楽を続けてみようと思った私は鹿児島大学学友会吹奏楽団に入団しました。中学・高校時代とは異なり、顧問ではなく団員自らが団の運営や指導を行っていることに驚き、大学生ならではの自由な活動内容に憧れました。

1年生のときは、吹奏楽コンクールにおいて九州大会へ出場し、例年の結果より良い賞をいただきました。私は高校時代とは異なる楽器を担当しており、不慣れなため不安が大きかったですが、努力が報われた大会となりました。同期や諸先輩方が一緒に苦手な箇所を練習してくださり、逆に団員と仲を深めることができ今となっては良い機会だったと思います。

その他にも、奄美の小中学校を回り演奏を行う演奏旅行、冬には鹿大祭での出店や定期演奏会を行いました。その後のコロナ禍を思えば、普通のサークル活動ができた貴重な経験です。

2年生となる直前からは新型コロナウイルス感染症が流行り始め、コンクールへの出場すら難しい状況になりました。サークルでは演奏する機会が一度もなく、お世話になった先輩方と最後の演奏の機会である定期演奏会までも中止となったことはとても悔しく、昨日のこのように思い出されます。

3年生になり、パートリーダーというサークルを動かす中心的な立場になりました。コロナ禍で手探りの活動をしていくことになり、失敗や不安が多くありましたが、結果、コンクール出場まで漕ぎつけることができ、金賞を頂きました。コロナ禍で出来なくなったイベントは多くありましたが、この時期に「前例の無いこと」が出来たのは私にとって一生ものの経験です。

私にとって大学での吹奏楽は、考え方や生き方の根幹となっていると感じています。



国際食料資源学特別コース

「友人様々な生活」
さまさま

熱帯作物学研究室

学部3年 松田 明子

私は世の中が変わった2020年に入学しました。不安や不満もありましたが、なんだかんだ楽しめているのは友人のおかげだと思います。

入学当初はオンライン授業がほとんどで、ずっと部屋着で家にいました。入学前の意気込みが薄れどんどんやる気が損なわれる気持ちになり、とにかく1人ではいけないと思い暇があれば友人と会うようになりました。友人と会う度に、ふざけては真面目な話をし、真面目に授業を受けよう、本を読もう、筋トレでもするか、など自分のレベルが上がる感覚を覚えます。また、国際コースにいる個性たっぷりのパワフルな挑戦家たちからも多くの刺激を受けます。夏に大学や高校の友人宅にお世話になる10日以上もの旅をしたときにも、留学に行きたい、レベルの高い大学院を志したい、本気のダイエットとは、理想の将来とは、恋愛とはなど、楽しくモチベーションが上がる話がありました。背中を押しあえる一生ものの友人とそのつながりに感謝する忘れられない旅となりました。日頃からコンビニで本気で美味しいものを探したり、学割を使ってヨガに行ったり、カフェに行って意識の高い女子大生風の朝活をしたり、たまには真面目に勉強したり、結局ふざけて爆笑したり、とにかく色々やって楽しむ忙しい毎日を送っています。時には全て1人で乗り越えることも大切ですが、正直私は今までもこれからも人のおかげで成り立っていくと思います。

当然授業で学べることは多くあり、その機会にも感謝します。しかし、それだけではなく20歳の今を自由に使って挑戦すべきだと思います。挑戦のモチベーションは友人にある、人とのつながりは宝である、私の生活は友人様々であるという一生の教訓をこのイレギュラーな学生生活ではっきり学ぶことができました。あと一年ちょっとの学生生活、まだまだ挑戦したいことがあります。きついことも友人と一緒に、自由にやりたい放題楽しんでやろうと思います。

メモリー

～進路・就職に役立つ先輩の経験・体験談～

教育実習奮闘記



「教育実習を振り返って」

農業生産科学科 応用植物科学コース
害虫学研究室
学部4年 福田 正宗

私は10月上旬の2週間、母校で教育実習を行いました。実習が始まる当初、2週間という期間はとても長いと思っていました。しかし、教材準備や農場での実習、授業見学など普段の大学での生活に比べ、慣れないことが多く、あっという間に1日が過ぎ、気が付くと教育実習期間は終わっていました。

私はこの教育実習期間を有意義なものにするために、まず「人に伝える力を身に付ける」、「生徒が変わるきっかけにする」という2つの目標を立て、教育実習に臨みました。

授業をするクラスは農業科3年生で、「野菜」という科目を担当させて頂きました。1回目の授業は1週間かけて授業準備を行い、本番に臨みました。人生初めての授業ではスライドの投影に手こずり、自分自身が落ち着かない状況で授業を進行させてしまいました。その結果、授業時間が想定していた時間より短くなってしまったり、生徒に授業内容が思うように伝わらなかったりと不甲斐なさを感じ、反省しました。

それからは、現役の先生方の授業見学を見る際、話し方・重要語句の伝え方・黒板の使い方など、テクニック面をより注意して見るようになりました。生徒が良い反応を示している授業を見ると「負けていけない」という気持ちになり、農場実習では授業見学で得たテクニックを実践し、生徒の反応を確かめました。

研究授業本番、前回の授業の反省点を活かし、落ち着いて授業を行いました。生徒と今まで積極的にコミュニケーションを取ってきたこともあり、対話的な授業をスムーズに行うことができました。結果、楽しく授業を行うことができ、満足できる部分はありました。しかし、生徒との距離感や黒板の使い方など、課題点も多く見付き、教員の偉大さを改めて感じまし

た。

教育実習全体を通し、教育現場の大変さと魅力の両方を知ることができました。教育実習生として4年ぶりに母校へ帰り、教師という視野で学校を見ることは誰にでもできる経験ではないと思います。目標を持って取り組んだこの2週間はとても充実したものでした。この経験を、今後の将来に活かしていきます。お世話になった先生方、生徒、関わって頂いたすべての皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。



「今日、先生始めます。」

食料生命科学科 食品機能科学コース
食品化学研究室
学部4年 古庄 珠実

母校の私立中高一貫校で3週間、中学3年・理科担当として教育実習を体験してきました。教育実習はあっという間で、実習終了後も学校に行きたくなるほど充実した教育実習でした。初めてのことが多く、戸惑いもありましたが、担当の先生や実習生、生徒など多くの人に助けられ、3週間終えることができました。

私は塾や家庭教師のアルバイト経験がなかったため、人前に立って教えることができるか不安でしたが、杞憂に終わりました。私は、意外と人前で話すことが性に合っていたようで、HRや授業を楽しく行うことが出来ました。また、授業後に生徒達が「先生、授業楽しかった!」「先生の授業分かりやすいから、高校3年生までずっと教えてほしい!」といった言葉をもらえたことも大変嬉しく、次の授業準備へのモチベーションに繋がりました。実習中は中学1年から高校3年まで様々な科目の授業を見学し、各先生方の授業構成や指導技術を学びました。また同時に、生徒の学習の様子から学ぶこともありました。1つのエピソードとして、「理科探究」という授業を紹介します。これは年間を通して身近な疑問を探究する授業です。生徒はグループ毎に様々な実験を行い、結果や過程を調べてまとめ、考察します。ある生徒は配布タブレットを活用して調べている時、知りたい情報が中々見つからず、苦戦していました。私が「〇〇って調べた?」と一つの理科用語を伝えるだけで、苦戦していた時間が嘘のように求めている情報がヒットし、生徒が感動している様子を見た時、知識の大切さを実感し

ました。今はネットを開けば何でも知れる情報社会です。しかし、用語や概念を知らなければ、情報の海から目的のモノを簡単に見つけることができません。この場面に遭遇し、初めて教育の大切さを根本から知ることができたと感じました。私も今後教育に携わる者として発展だけでなく、基礎も重視して研究を続けたいと思います。



教育実習風景



「教育実習を振り返って」

農林環境科学科 地域環境システム学コース
農地工学研究室
学部4年 手嶋 清香

私は、2週間出身高校で生物の教育実習を行いました。

実習を通して最も衝撃的だったことは、担当してくださった先生から「新型コロナウイルス感染症の影響で医療系の学部を目指す生徒が少なく、その結果、生物選択者の人数が減っている」と聞いたことでした。私が在学していた時は学年400人中40人の生物選択者がいましたが、現在は400人中20人程になってしまったそうです。農学部には生物選択の学生が多いため、この話を聞いて数年後には農学という分野の人気がなくなってしまうのではないかと危機感を抱きました。今回の実習で私が授業を行わせていただいたのは、文理が分かれていない1年生であったため、少しでも生物や農学という分野に興味を持ってもらえるように授業中に自分の体験談を話すことにしました。

動物細胞、植物細胞の構造についての内容で2コマ×5クラスの計10回授業を行いました。1コマ目の授業で生徒が板書を写すのを待つ間に、動物細胞にまつわる体験談として大学1年次に行ったハツカネズミの解剖の話をしました。最初に授業を行ったクラスが理

数クラスだったこともあり、解剖の話についての生徒の反応は良かったと思います。しかし、担当の先生から「普通クラスに解剖の話をする時はもうちょっとマイルドに話してね」とご指摘を受けました。「解剖の話をするだけで顔色悪くなっちゃう生徒がいるし、私も1度レバーの話をして男子生徒を気絶させたことがあるのよ〜」と、先生は続けられました。私は、生徒に配慮して話す必要があったことを反省すると同時に、農学部という生物選択者の多い環境ではなく全く異なる環境に自分がいることを実感しました。理数クラスを含めて解剖の話を計5回しましたが、無事に気絶者を出さずに授業を終えることができました。

教育実習の最終日に、担当したクラスの生徒から授業中の雑談が面白かったと言ってもらえた事はとても嬉しかったです。

インターンシップ体験記



「インターンシップを終えて」

農業生産科学科 畜産科学コース
家畜繁殖学研究室
学部3年 古賀 涼香

私は8月下旬の2日間、鹿児島県庁の畜産課（全国和牛能力共進会推進室）にてインターンシップに参加しました。参加した目的は、鹿児島においての県の技術職の業務について詳しく知るためでした。そして、実際に仕事を体験したり職員・農家の方々から話を聞いたりすることで新たな学びがあると思い、インターンシップに参加しました。

畜産の技術職員は畜産振興に向けた予算編成など行政分野を担う本庁、各地域で農家と直接関わりながら生産方法や技術を普及していく振興局、技術開発や家畜の改良を研究する畜産試験場や肉用牛改良研究所といった大きく3つの分野に分かれて仕事をされています。今回は1日目に本庁各係の業務概要についての説明、2日目には曾於中央家畜市場の視察と子牛価格・枝肉価格の下落に関する畜産農家の方へのヒアリングを体験しました。業務説明では、どの係の方も私の質問に対して丁寧に対応していただき、仕事内容以外にも離島での勤務や課内の雰囲気についても知ることができました。また、10月の全国和牛能力共進会鹿児島

(12) あらた同窓会学生向け会報

大会に向けた業務も知ることができ、一般の方も楽しめる工夫や予算など普段考えたことのない運営側の様子を学びました。

この2日間で畜産農家の方へのヒアリングが最も印象的でした。子牛価格の下落について繁殖農家の方からは「飼料にかける費用が高く、子牛価格が安くても売らなければ経営ができなくなってしまう。」といった切実な声を聴き、実際の現場の様子と生産者の求めることを知る必要性や自分自身の知識の不十分さを実感しました。

今回のインターンシップでは、大学の講義だけでは学べない現場の様子やこれからの自分自身の進路を考えるための貴重な体験ができました。この体験をモチベーションにし、これからの大学生活をより有意義なものにできるよう努力していきます。



「インターンシップを終えて」

食料生命科学科 焼酎発酵微生物科学コース
醸造微生物学研究室
学部3年 林田 真歩

私は今年の夏休みに、大分県庁において2日間のインターンシップに参加し、循環社会推進課の方々と一緒に実際に化学職のお仕事を体験させていただきました。具体的にはエクセル入力などの事務作業、研究センターでの実験、新しく建設される廃棄物処理場における確認業務などの現場仕事を体験させていただきました。私がインターンシップに参加しようと思った理由としては、私が現在大学で学んでいることが活かせる仕事であるのかどうか知りたかったからです。公務員の仕事内容は自分で調べたことで得た知識では分からないことが多いと感じていたので、実際に自分がやってみることで、全てではないですが、内容について理解できました。私が化学職の仕事でイメージしていたのは研究や実験だったのですが、実際にはそれだけでなく、民間企業の方との事業の話し合いや調査、相談受付など幅広い仕事をしていると感じました。また、配属先が約2年ごとに変わることによって様々な仕事を経験でき、スキルアップできることが魅力的だと感じました。担当して下さった職員さんも今新しい資格の勉強をしているとおっしゃっていました。実際に働くことになった場合に、どのような職員になりたいのかという将来像をイメージできるようになったり、自分に向いているかどうかを少しですが確かめることがで

きたりしたのが、私にとっては将来について考える上での大きな一歩になったと感じています。また、インターンシップを通して、視野を広げることができ、大学で学んだことを活かす方法は研究や実験以外にもたくさんあるということが分かりました。自分の知識が活かせる仕事に就くことはもちろん、就職した後も経験を重ね、新しい知識を得ながら自分が大きく成長できる仕事をしたいと思います。



「インターンシップを通して学んだこと」

農林環境科学 地域環境システム学コース
農地工学研究室
学部3年 三浦 菜名穂

私は2022年9月、つくばにある農研機構農村工学研究部門施設整備グループのインターンシップに参加しました。研究職に興味があり、研究職の方は普段どのようなことを行っているのかまた現在どのような研究が行われているのか実際に自分の目で見てみたいという思いで参加をしました。また、これから将来どのような研究が必要なのかなどについても考える参考にしたいと思いました。

2週間の期間内で、現在行われている研究について聞き、農工研内にある試験ため池を対象として、ドローンやGNSS等の測位技術を用い3次元形状データの作成技術に関する学習と解析などを行いました。研究所内の圃場に小規模な盛土を製作してもらい、実際に3次元情報の取得から3次元モデルの作成を行いました。近年、労働力不足や安全性の問題から情報化施工が推進されています。情報化施工を可能にするために3次元情報が必要になってくるので今回は3次元モデルの作成を行いました。3次元モデルの作成は、測量を行い対象の画像を取得することからはじまり画像をソフトに取り込み、組み立てを行いました。農工研の研究員の方も3次元モデルの作成経験がなく何度もやり直しや修正を繰り返し苦戦しました。

研究者として働く上で大切なことや大変なことなどインターンシップの体験を通して学びました。新しいことにも挑戦し常に試行錯誤を繰り返すことは大変でしたが、少しずつ目標に近づく過程が面白くやりがいがある仕事だと感じました。また、「情報の活用DX」について考えることがこれから必要になってくるということを感じました。学校では、測量をしてデータを出す、地理情報システムQGISを用いてデー

タを整理するなど、情報を求める学習が多かったが、そのデータを使える形に直しより活用できるものになることがこれからのスマート農業に求められているのだと思いました。情報を様々な角度で見ることができるよう、また、活用することを考えていきたいと思いました。

介護体験記



「介護等体験を通して」

農業生産科学科 応用植物科学コース
観賞園芸学研究室
学部3年 山手 凧沙

私は、教員免許を取得するにあたって介護等体験を行いました。貴重な有意義な時間を過ごすことができました。今回の体験では、コミュニケーションの重要性を学びました。介護等体験中にお世話になったデイサービスセンターでは、ご入所者の方々とコミュニケーションを主に行いました。普段ご年配の方とお話をする機会がなかったので、実習の初日は大変緊張しました。私が挨拶をするとご入所者の方々は私に笑顔をもってください、多くの話をしていただきました。

和やかな雰囲気のある施設であったため、よりよいコミュニケーションをとることができたのだと感じています。また、職員のみなさまが行う入所者の方々と接し方は、非常にアットホームで、優しく、居心地がいいように感じ、コミュニケーションの取り方を含め多くのことを学ぶことができました。お世話になったデイサービスセンターでは、職員のみなさまやご入所者同士がコミュニケーションをしっかり取っていました。こうした他者との関わりが、ご入所の方の生きていく糧になるのだと感じました。話すことにためらうと相手の感情を読み取ることは難しいですが、勇気をもって話すことで相手の考えを読み取ることができました。さらに笑顔で話かけることが重要で、相手の目をみて話すと、相手に伝わりやすく、お話も楽しく行うことができました。私の教員免許を取得についてご入所の方とお話をしましたが、ねぎらいの言葉をもらい私の励みとなりました。また、コロナ禍において、介護等体験を実施できるのか不安でしたが、無事

に体験をすることができたのは受け入れてくださった施設の方々のおかげだと感じています。私たち学生ができることは少なかったと思いますが、貴重な体験をさせていただき感謝しております。



「介護体験実習を終えて」

食料生命科学科 食環境制御科学コース
植物栄養・肥科学研究室
学部3年 久徳 美咲

夏休み期間中に介護体験実習を受けた。この実習は中学校の教員免許を取るのに必要な実習の一つで、8月29日～9月2日の5日間に通所介護施設「デイサロンピース草牟田」にお世話になった。

実習初日にまず施設の利用者数の多さに圧倒された。認知症の症状を抱えていたり、思うように身体を動かせなかったり、目が見えなかったり、怪我をきっかけに身体を動かす運動に励んでいたりと、施設を利用する方たちは、あらゆる目的や悩みを抱えていた。そして、皆さんそれぞれが、自分なりの楽しみや目標を見つけて通っておられる方たちばかりだった。施設内には、そのような利用者さまの様々な要望に対応できるような器具や活動が充実していた。何より、職員の皆さんがそれらを活かして、抜群のコミュニケーション能力で適切な支援を届けていた。

限られた職員の方たちで、多くの利用者さまをサポートすることは非常に大変で、根気のいることである。利用者さまにお話をうかがうと、こちらの施設の快適さを楽しそうにお話してくださる方たちばかりだった。決して職員の人員に余裕があるわけではないだろうが、職員の皆さんが連携し合って、素晴らしいサービスを提供していることに感銘を受けた。

過ごしてきた環境も、性格も、悩みも異なる人と向き合うという点では、介護の現場で働く方たちも、私の目指す教師という職業も同じである。「伝わる」伝え方で話をして、うなずき、オウム返し、要約などを駆使しながら話を聞くことは、介護施設と学校のどちらの現場でも重要なことであると感じた。これから社会に出ると、あらゆる場面で判断を迫られることになるだろう。そのときに、生徒や保護者に対して納得した説明をしたり、適切な行動をとったりすることができるかは、自己の知識や体験がものを言う。5日間という短い期間での実習ではあったが、自分を見つめ直し、さらに成長できる貴重な体験ができた。

最後に、今回の介護体験実習でお世話になった施設の職員の皆さんと、実習担当の太田さんに感謝を申し上げたいと思う。ご指導いただいたことを糧として日々精進し、立派な教師になります。



「介護体験記」

農林環境科学科 森林科学コース
森林保護学研究室
学部3年 首藤 広大

今回5日間にわたって介護実習でデイサービスセンターの方に行かせていただきました。そこで、いろいろな障害を持った方や老人の方と会い、その方々や施設の方といろいろな話をしに行くことで、二つのことを学ぶことができました。

一つ目は、コミュニケーションの取り方です。友人とのコミュニケーションは、よく取っていますが、自分よりも一回りも二回りも長く生きていらっしゃる方々と会話する機会というのは、とても少ないです。また、利用者の中には認知症をもっていた方もおり、同じ話を繰り返しされる方も中にはいました。しかし、その話を遮ることなくしっかりと聞いてあげうまく別の話題に変えてあげることで、楽しく会話ができることがわかりました。また、目線をしっかり合わせてあげる、声に強弱や抑揚をつけてあげる、ジェスチャーなど、声以外の体全体を使って表現してあげると理解してもらいやすいことなど、コミュニケーションの取り方を学ぶことができました。

二つ目は、介護する側の心の持って行き方についても学ぶことができました。介護実習に参加するまでは、とても大変な仕事であるため、職員の人たちはどのような心情でこの仕事についたのだろうと考えていました。職員の方と会話して行く中で、一番心に残ったのは、介護するという意識ではなく、残りの時間が少なくなっている人や何かしらの障害を抱えている人たちに一日一日を楽しかったと思ってほしくて仕事に臨んでいるということです。確かに実際に働いている現場を見ると、言葉遣いなどにも気を付けておりだいたいフランクに接することで、利用者との距離感がだいぶ近いことに気づきました。

以上の二つについて、今回の介護実習を通して学ぶことができました。

留学体験記



「コロナ禍でのマルタ共和国への留学」

農業生産科学科 畜産科学コース
家畜繁殖学研究室
学部4年 住田 耀子

私は昨年10月から約半年間イタリアの南に位置するマルタ共和国に留学しました。当時はコロナ禍ということもあり入国審査時の書類審査は大変厳しく、入国後も日本と違い法律が突然変わることがあり、1か月後からワクチン証明がなければスーパー以外入店が禁止になるため、ワクチン接種の列に1日かけて並ぶということもありました。通常とは大きく異なる留学になりましたが、とても貴重な経験ができました。

まずは、様々な国の人と交流できたことです。マルタ共和国では、私のように英語を学びに来た人もいれば出稼ぎに来ている人、観光地なので観光で長期滞在している人など様々なバックグラウンドを持つ人がいましたが、その中で南米や欧州・アジア圏など様々な国の人と友人になることができました。時には、語学学校が所有するアパートでルームシェアをしていた他国の学生と文化の違いで衝突することもありましたが、お互いの妥協点を作って解決するようにしました。人と交流するには、相手を受け入れることだけでなく自分も主張することが大切だと学ぶことができました。



クラスの先生と学生さんとの会食

もう一つは、日本にはない建物を見たり食べ物を食べたりしたことです。マルタ共和国の首都バレッタは都市全体が世界遺産であり、石造りの綺麗な建物が並んでいました。また、海に囲まれているため透明な海を様々なところで見渡すことができました。そして、

EU加盟国間では入国審査が厳しくなかったため、イタリアのローマに数日間1人で旅行しました。ローマの治安のせいで移動中はずっと警戒していましたが、コロッセオやトレヴィの泉などを実際に見ることができ、現地で有名なパスタ屋でパスタを堪能することもできました。初めての1人旅行で不安が大きかったですが、マルタへ帰国後は達成感が強くまたチャレンジしたいです。

英語の習得を目的とした半年間の留学でしたが、海外での経験は私自身を語学力以外でも成長させてくれました。



留学を終えて

食料生命科学科 食環境制御科学コース
植物栄養・肥料学研究室
学部3年 鶴田 真帆

2022年3月から8月の5か月間、バンクーバーへ留学に行った。大学入学時から留学に行きたいと思っていた私にとって、新型コロナウイルスは予想外であった。コロナが流行してから大学を介した交換留学や海外研修は募集が行われず、休学して私費での留学を行うことに決めた。

最初の4か月間は語学学校に通った。当時は留学可能な国が限られていたため、語学学校や街中は日本人であふれていた。留学の失敗談として、留学先で日本

人と過ごし語学が上達しないというのがよく挙げられるが、私はこの状況をマイナスに思わなかった。同世代であっても留学の目的や将来設計が異なり、海外が好きという共通点を持った人たちとの出会いは、将来の新たな選択肢を与えてくれた。

語学学校卒業後は、WWOOFという農家とボランティアを繋げるサイトを利用し、バンクーバーから近いガブリオラ島という小さな島でファームステイをした。アルパカやヤギ、鶏、馬の世話を週5日行い、仕事後や休みの日はビーチやトレッキングへ出かけた。自然あふれる島の様子は私のイメージしていたカナダそのものだった。同じボランティアとして来ていたヨーロッパ出身の3人とともに過ごしたことで、英語力はめきめきと上達した。ファームステイ中に桜島の噴火がテレビのニュースで報道された。私の地元だと言うと家族は無事かと何度も尋ねられた。周りの反応がとても真剣だったので、初めて活火山のそばに住むのが危険だということに気付かされた。

留学に行く決めてまで時間がかかった。世界がこのような状況のときに行けるのか、こんな状況であっても行きたいのかという自分の意思が何度も揺らいだ。しかし「やった後悔より、やらなかった後悔は大きい」という言葉が私の背中を押した。また私の周りの人たちは私の意思を尊重し、応援してくれた。決して自分一人では留学を無事に終えることができなかった。これからは留学で学んだことを日常生活、また誰かの役に立てるよう行動していきたい。



編 集 後 記

新型コロナウイルス感染症、戦争、円安、温暖化などなど、私たちの生活を脅かす要因を挙げればきりがありません。当初は遠隔授業に戸惑っていた学生、教員も今ではかなり慣れてきたように感じます。私もいまだにガラケイのアナログ人間ですが、最低限のZoom授業の手法は身についたと自負しています。そのガラケイもラインができるものを選んだのですが、とうとう、「この機種のアナログは更新できません」という、世にも恐ろしい連絡がラインで届くようになりました。困ります。一方、今のところ、学生さんの就職率はそれほど悪くはないようです。しかし、今後の世の中がどうなるのか、想像がつきません。その中で、一番、大切なことは、自分を見失わないことと、利他の精神をもつことではないかと、大先輩の故 稲盛 和夫氏の著書を拾い読みして、考える今日この頃です。

(文責 附属農場 遠城 道雄)

鹿児島大学農学部 あ ら た 同 窓 会

〒890-0065 鹿児島市郡元一丁目2-24

TEL・FAX 099(285)8537

e-mail(arataakai@mc2.seikyou.ne.jp)

振替口座 02010-2-876

事務局の業務日 月・水・金(10:00~16:00)

印刷所	株式会社鹿児島新生社印刷
住所	鹿児島市七ツ島1-3-21
TEL	099-261-0111
FAX	099-261-3100
E-mail	kagoshima@shinsei-p.co.jp



学生による野菜の自主栽培



学生による化学実験風景



農・獣医共通棟正面



農学部C棟とD棟の間の玉利通り